



太平記 邑楽英雄列伝

MACHIKADO REPORT No.186
街角特派員レポート

乱世を駆け抜けた英雄たちの武勇伝

乱世を駆け抜けた英雄たちの武勇伝に迫る

郷土の歴史を知りたいという思いから

歴史に名高い、新田義貞

ここで、群馬県に住んでいる皆さんは小生からご年配の人まで多くの人が、ご存知の文だと思えます。そう、これは上毛かるたの「れ」に当たる鎌倉時代に活躍した武将、新田義貞を紹介した文です。その新田義貞に任せ、戦乱を駆け抜けた武将たちが、ここ邑楽町にもいました。そして、今現在もまだその武将たちゆかりの場所は残っています。私も最近入つてに、この武将たちの存在を知りました。はじめあまり興味はなかったのですが、関係する本を読み進んでいくうちに、あの「太平記」にまで名を連ねていた武将だと知ることができました。ゆかりの場所には、エピソードとともに関心する内容も残っています。



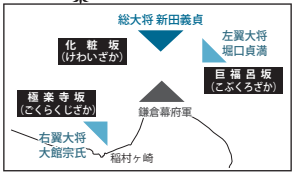
県民なら誰でも知っている「上毛かるた」

私自身もあまり詳しく知らない郷土の歴史、今回テーマとして歴史的戦いの中に身をおいた武将たちに焦点をあてたのも、もつと郷土の歴史を知り、今までのただ古い建物があるなというだけの視点から、実はとても歴史的価値のあるもの

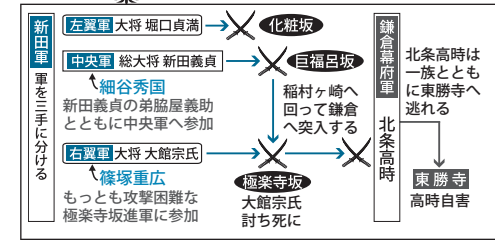
新田軍 VS 北条軍 (鎌倉幕府軍)

↑一寿斎芳員筆「新田義貞鎌倉合戦」(太田市立新田図書館所蔵)

「鎌倉合戦」戦況図



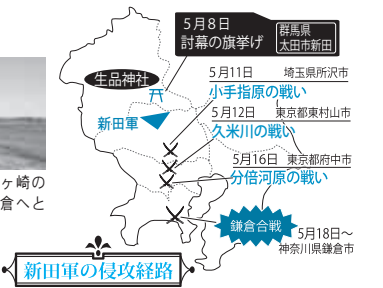
鎌倉合戦フローチャート



生品神社にあった新田義貞の銅像

▲新田義貞の銅像は、何者かに盗まれ、現在は生品神社に存在しない

稲村ヶ崎の伝説
極楽寺坂を突破した夜、月の光に極楽寺坂を見渡すと、北は切り通しまで山高く、数万の兵が陣を並べ、南は稲村ヶ崎の砂浜は狭く、幕府軍の兵船が沖に連なり、鎌倉に攻め入るすきもなかった。義貞は、馬からおりて甲をぬぎ、海上はるかに伏し拝み、「潮を退けて道を三軍に開かしめ給へ」と龍神に祈って黄金作の太刀を抜いて海中へ投げ入れた。すると不思議にも、稲村ヶ崎の二王口ばかりが干潟となり、新田軍はそこを渡って、いつせいに鎌倉へ攻め入った。



新田義貞軍は稲村ヶ崎の干潟を渡って、鎌倉へと攻め入った

三武将、風雲急を告げる 鎌倉合戦に参陣!

- 新田四天王 篠塚伊賀守重広
- 忠義の武将 中野藤内左衛門景春
- 武略の名将 細谷右馬助秀国



街角特派員 岩松雄志 (大根村琵琶町10区)

「郷土の歴史を知りたい」、そんな思いから、今回の街角特派員レポートに取り組みました。を見ているのだという視点に立ちたいと思つたからです。さあ皆さん、私と一緒に太平記の英雄たちの足跡をたどってみませんか。

新田軍

鎌倉幕府討幕を目指し、三武将が生品神社へ集結、いざ鎌倉へ。

三武将の出陣

元弘三年(一一三三)五月八日午前六時、清和源氏新田義貞は生品神社(太田市新田)で鎌倉幕府討幕の兵を挙げました。新田氏の大甲黒の旗を掲げ、後醍醐天皇から下された繪旨(勅命の文書)を拝読、集結した一五〇騎とともに先祖新田義重の霊を祭つた寺尾城跡の笠懸野へ出陣。

この新田軍に細谷秀国、中野景春・弟の義春、篠塚重広が参陣していました。新田軍はまず、北条方の上野国守護代の長崎孫四郎高貞を新田庄世良田で打ち破りました。新田軍は、上野国内から参陣



▲新田義貞の像 (東京都府中市分倍河原駅前)

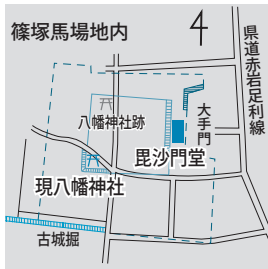
する武士が多く、越後の新田一族、甲斐・信濃の源氏も馳せ加わり、さらに勢力を増しました。
九日、武蔵へ南進し、十一日、小手指原(埼玉県所沢市)、十二日、久米川(東京都東村山市)、十六日、分倍河原(東京都府中市)で幕府軍を次々に破り、十八日には新田軍の兵力を三手に分け、鎌倉攻撃を開始しました。左翼の大将堀口貞満は、巨福呂坂の切り通しへ、右翼の大将大館宗氏は極楽寺坂へ、進軍。この軍に篠塚重広が加わり、細谷秀国は中央軍の新田義貞、弟の脇屋義助とともに化粧坂へ向かいました。
十九日、大館宗氏は極楽寺坂で討ち死に、義貞は宗氏戦死を聞き、稲村ヶ崎へ回って鎌倉突入の機をうかがい、二十一日、潮が引いて、鎌倉方の兵船が遠のいたので干潟を渡り、付近の在家に火を放ち南風に燃え広がるのに乗じて、若宮大路へ進撃して乱戦。北条高時一族とともに東勝寺に逃れて切腹。時に五月二十二日、北条氏は滅び、鎌倉幕府はついに倒れたのです。



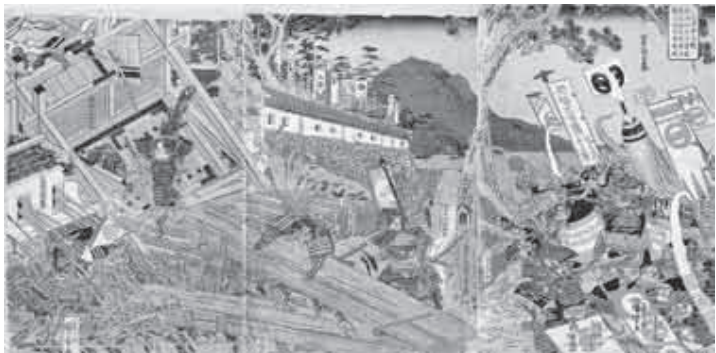
新田義貞による鎌倉幕府討幕の旗挙げが行われた生品神社(太田市新田)



現在の毘沙門堂（篠塚馬場）



現在の八幡神社（篠塚馬場）



●新田軍 VS ●足利軍

新田軍は、その上を渡って攻め入り、大勝しました。もともと大卒塔婆を引き抜き、向こう岸へ倒し、橋にしてみました。新田軍は、その上を渡って攻め入り、大勝しました。

出してしまつたのです。重広は、倒した敵兵を積み重ねて、味方がくるのを朝まで待っていたといひます。夜が明けて、義貞がこの騒動の報告を受けると、重広の武勇に大いに感心したと同時に、そのあまりの強さに、あきれはてました。

五月十八日、新田軍の鎌倉総攻撃は、巨福呂坂・化粧坂・極楽寺坂の三手に分かれて開始され、重広は一番難所の極楽寺坂方面の攻略を担当する大將大館宗氏の軍に参加しました。ところが、十九日早朝、極楽寺の切り通しを突破した大館宗氏が、討ち死にするという事態に陥り、重広は援軍に来た義貞の本隊に参加し、稲村ヶ崎から鎌倉に入り奮戦します。

箱根竹ノ下の合戦に敗れて伊豆の国府へ向かう途中、足利軍の一条次郎という者が新田義貞を見つけ、馬を走りよせ太刀を引き抜いてきました。重広がとっさに間に入って、一条が振り下ろす太刀を左手の袖で受けとめ、つかんで投げ飛ばし、一条を大力の早わざで、倒れずに踏みとどまり、よるめく足を踏みとどめ、なおも義貞に走りかかろうとしてきました。それを見た重広は馬から飛んで降り、両ひざを合わせて、さかさまに蹴倒して、起き上がろうとするところを押さえつけ、一条の首をとりました。

一条の家臣たちは、目の前で主人を殺され、重広を討とうと襲いかかってきました。ところが、重広はかけ違つては蹴倒して、蹴倒してはかけ違い、たちまち九人までも討ちとりました。これを目の当たりにした足利勢の中からは、重広に戦いを挑む者が、だれもいなくなつてしまつたといひます。

歌川國芳筆「三井寺合戦」(大信寺所蔵)



重広は「卒塔婆を立てるも、橋を渡すも功德は同じ」と言つて、大卒塔婆を引き抜いて橋を架けたといひます。当時、橋を勸進(寄附)するのは、大きな功德だった。

三井寺の合戦

篠塚伊賀守重広の奮戦！

建武三年(一三三六)一月十六日、新田軍は足利方の細川定禪が立てた三井寺(滋賀県大津市)の攻撃を開始しましたが、定禪が木戸を開き、掘にかけてあつた橋を引き外してしまつたため、攻めあぐんでいました。義貞の弟脇屋義助は、いらだつて「頼りないぞぞぞだ。たつた一つの木戸のために、こんな小さな城を攻め落とせぬ」といふことがあるか。栗生、篠塚はおらぬか、あの木戸を引き破れ。畑、巨理はおらぬか、切つて入れ」と命令しました。

すぐさま重広と栗生が馬から飛んで降り、木戸へ走り寄つて見ると、堀の前には深い掘があり、その兩岸は切り立つていて、橋板はみなはずされ、橋桁だけ残つていました。篠塚、栗生は、どうしてここを渡ろうかと思案して左右を見ると、近くの塚の上に高さ約18メートルにもなる大卒塔婆が立っていました。「これはちよどよい橋板」とばかりに二人は走り寄つて、かけ声もろとも大卒塔婆を引き抜き、向こう岸へ倒し、橋にしてみました。新田軍は、その上を渡って攻め入り、大勝しました。

篠塚伊賀守重広

新田四天王と呼ばれし
天下無双の豪傑

Shinozuka Iganokami Shigehiro

しのづかいがのかみ しげひろ



天下無双の豪傑出陣

篠塚重広、鎌倉合戦に参陣！

天下無双の武將篠塚重広は、邑栗町篠塚の馬場にあつた篠塚城五代城主でした。元弘三年(一三三三)新田義貞が清和源氏の棟梁(統率者)として後醍醐天皇から綸旨(勅命の文書)を受け、鎌倉幕府を討つ旗挙げを、郷里の新田庄生品明神で行つたとき、重広は篠塚城から馳せ参じています。これは篠塚氏の先祖山重忠が、無実の罪を着せられて元久二年(一二〇五)六月二十二日、北条義時のために武蔵国二俣川(今の横浜市旭区)で討たれた雪辱を晴らすために、参陣し

たといわれまふ。

五月十一日、新田の軍勢が、小手指原(埼玉県所沢市)まで進軍すると、北条方の大將金沢貞将率いる幕府軍と遭遇合戦となりました。その日の夜、重広は義貞にすぐに夜討ちをかけるべきと進言しましたが、明け方の決戦にこだわった義貞は、この作戦を聞き入れませんでした。そこで重広は単身敵陣に忍び込み、北条軍の番兵に本陣はどこにあるのかとたずねました。すると突然、襲いかかってきたので、重広は鉄撮棒を打ち振るって、たちまちのうちに、二十人ばかりの兵を打ち倒してしまいました。この騒ぎに敵陣は夜討ちと思ひこみ、後方の陣へ逃げ

鉄撮棒

かなさいぼう

新田四天王、篠塚伊賀守重広必殺の武器

新田四天王

篠塚伊賀守重広
しのづかいがのかみしげひろ

栗生左衛門頭友
くりうざえもんあきとも

畑六郎左衛門時能
はたるくろうざえもんときよし

由良新左衛門具滋
ゆらしんざえもんともしげ

長さ八尺(約2.4メートル)の金棒。重広は、この金棒をやすやすと持ち上げ、戦場を自由自在に走りまわり、敵をなぎ倒した。



伊賀守の勇力(新田世忠記)

夜光瓢 やこうひさご

重広の豪傑ぶりを伝える品

酒が五升入る瓢(ひょうたん)。重広は合戦のたびごとに、この夜光瓢を携えて、七合入る杯で酒を飲んだという。戦いの最中は、木曾山中の山賊討伐をきっかけに飼うことになった木曾虎という愛犬に番をさせておいたという。



福岡県福岡市星野家所蔵



二代目歌川広重筆「篠塚伊賀守」(大信寺所蔵)



沖島（愛媛県旧島村、現上島町）にある篠塚伊賀守の宝篋印塔（ほうきょういんと）。その昔から篠塚伊賀守の墓と伝えられています（写真提供・岡田真幸さん）

関東帰還
篠塚伊賀守、一鬼入道と名を改める

因島（広島県尾道市）へ渡った篠塚伊賀守は、島の南端の岬城の城主となりましたが、興国三年（一三四三）五月九日に足利軍の攻撃に遭い、城から脱出。沖島（愛媛県上島町）へと逃れました。沖島滞居後、村上水軍の助力により、瀬戸内から船で利根川河口の波崎（茨城県神栖市）に上陸。ところが、関東一円が足利方の支配下になったのを、身をもって知った伊賀守は、茅原（東京都台東区）の里にとどまり、稲荷社の傍らに庵を結んで、名を一鬼入道と改め、その後しばらくして、茅原の里を跡にしました。遠く隠岐島を目指して…。

隠岐島の海上刈田、島根県隠岐郡海士町）の村上水軍の本拠を訪ねた一鬼入道は、当主の村上助九郎と出会う。そこで筑後（福岡県）の星野氏と肥後（熊本県）の菊池氏が、征西將軍懐良親王を支え、南朝のために尽力していることを聞き、すぐにでも星野氏を訪ねたいと思いつき、一路筑後へと再び旅立ったのです。

年（一三三九）八月十六日、崩御され、後村上天皇が南朝の皇位につきました。興国二年（一三四一）九月、根尾城が足利方の土岐頼遠に攻められ、脇屋義助軍は尾張へ退却。敗軍の兵を集めて伊勢・伊賀を経て、南朝のある吉野へ参内。義助は後村上天皇に拜謁し、藤島での義貞死後の状況などを報告しました。興国三年（一三四二）四月一日、大将脇屋義助は勅命を受け、篠塚伊賀守等に従えて四国・伊予（愛媛県）方面の南朝方勢力の増強を目指し吉野から出陣。四月二十三日には伊予へ上陸して国分城へ入りしました。ところが、不運にも義助は発病し、五月十一日には死去します。

永遠の眠り
戦いに明け暮れた生涯に幕を閉じる

篠塚一鬼入道が筑後国星野の妙見城に到着したのは、正平二十年（一三六五）十月二十七日のことでした。一鬼入道は、星野氏とともに征西將軍のために忠勤を励むことを誓い、九州の地で数々の戦歴を重ねます。征西府と足利方の合戦が続きましたが、元中九年（一三九二）十月ついに南北朝の和平が成立します。応永九年（一四〇二）二月二十日、千代田（福岡県朝倉市）の飯住まいにいた篠塚一鬼入道は、いつものように朝早く起きて沐浴をすると、東方に向かって光を拝み、吉野をはるかに拝してから、裏山の長慶法皇（吉野朝三代の天皇）の御陵を拝し、新田義貞一門の霊に経を手向けました。そして、末子篠塚房五郎重運に対して遺言した後、辰の上刻（午前八時）安らかに永眠しました。年九十三。戦乱を駆け抜けた波乱に満ちた生涯に幕を閉じたのです。



茨城県神栖市にある礎石（いかり）。篠塚伊賀守が、瀬戸内から村上水軍の助力で関東に帰還したときに、乗船していた船の礎石と伝えられています（写真提供・岡田真幸さん）



大信寺住職 岡田真幸さん（寺中・26区）

太平記に登場する豪傑が、この邑楽町出身ということを知ってほしいですね。

当寺の北には伊賀守の御廟があり、宝篋印塔が祭られています。宝篋印塔には、「大信寺殿智証大禪定門」、暦応三年（一三四〇）五月六日と刻まれています。「暦応」は、北朝側の元号で、南朝側では「興国」が、その元号にあたります。おそらく、篠塚の地は足利氏（北朝側）の勢力だったので、元号「暦応」を使うしか方法がなかったのでしょう。南北朝動乱の後、足利氏の室町幕府となつてからは、南朝にゆかりのある人々は世を忍ぶ存在になりました。ですから、南朝の伊賀守の墓も郷土の人たちや子孫たちによって、この地にささやかに造られ、傍らに山神の社を祭って、ひそかに供養が営まれるようになり、江戸時代には山神さまのお祭りとして、地元の人々の年中行事になったようです。



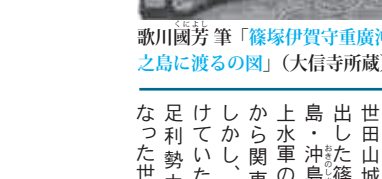
石造の宝篋印塔に証は、「大信寺殿智証大禪定門」、五月六日と刻まれています



廟印の徳神守山並伊賀守の墓は、伊賀守の墓が宮内省の管理下にある

篠塚伊賀守重広の菩提所大信寺

当寺の北には伊賀守の御廟があり、宝篋印塔が祭られています。宝篋印塔には、「大信寺殿智証大禪定門」、暦応三年（一三四〇）五月六日と刻まれています。「暦応」は、北朝側の元号で、南朝側では「興国」が、その元号にあたります。おそらく、篠塚の地は足利氏（北朝側）の勢力だったので、元号「暦応」を使うしか方法がなかったのでしょう。南北朝動乱の後、足利氏の室町幕府となつてからは、南朝にゆかりのある人々は世を忍ぶ存在になりました。ですから、南朝の伊賀守の墓も郷土の人たちや子孫たちによって、この地にささやかに造られ、傍らに山神の社を祭って、ひそかに供養が営まれるようになり、江戸時代には山神さまのお祭りとして、地元の人々の年中行事になったようです。



歌川國芳筆「篠塚伊賀守重広沖之島に渡る図」（大信寺所蔵）

世田山城陥落

世田山城に戦場はただ一人立つ！
当時、伊予の守護を南朝より任されていたのは大館氏明で、義助亡き後、氏明が大將となり、世田山城（愛媛県西条市）を守備。篠塚伊賀守は副将として世田山の搦め手（後ろ側）にあたる笠松城を守

世田山城の陥落後、脱出した篠塚伊賀守は、因島・沖島へと渡り、村上水軍の助力で瀬戸内から関東へ帰還する。しかし、そこで待ち受けていたのは、すでに足利勢力の支配下となつた世であつた…。



世田山城周辺の城

塚伊賀守ただ一人は、大手の一、二の木戸を押し開き、出で立ちました。細糸の鎧に龍頭の甲の緒をしめ、四尺三寸（約1.29メートル）の太刀を持ち、八尺（約2.4メートル）あまりの金操棒を小脇にかかえ、「新田左中将殿に、騎当千とたのまれし、篠塚伊賀守という者ここにあり。討つて勲功にあずかれ！」と大音声を張り上げて、敵中に突入していきました。敵も、新田軍でその武名を轟かせた伊賀守を討ち取ることであれば、大変名譽なことになるので、追いかけて何度か戦いを挑みましたが、討ち取ることはできません。こうして篠塚伊賀守は、世田山城を脱出して六里（約24キロ）の道のりを二百騎あまりの敵兵に送られて、その日の夜半に今張浦（今治市）へ着き、船に乗って一路、因島へ向かったのです。

景春出陣す

義貞に付き従い戰場を駆け抜ける
中野藤内左衛門は本名を景春と呼び、中野氏二代国継の子として生まれ、元徳二年（一三三〇）五月十四日、国継が死去すると、二十九歳で中野城三代城主となりました。

元弘三年（一三三三）五月八日、新田義貞が後醍醐天皇の綸旨を受け、鎌倉倒幕の旗争げをする中、景春は弟の義春、そして家臣たちを引き連れ参陣。幕府滅亡後、新田義貞は鎌倉勝利者として建武政権に参画することになりました。

ところが、建武二年（一三三五）八月十九日、武家政権を目指す足利尊氏が、建武政権の恩賞に不平を抱く武士たちを集め反旗を翻す。これを受け後醍醐天皇は、建武二年十一月八日、新田義貞に足利尊氏追討の命を下しました。景春もこの新田軍の中にいました。これにより、足利・新田両軍入り乱れての合戦となり、後醍醐天皇は吉野へ移って南朝となり、尊氏は京都に北朝を成立させ、これに対抗したのです。

延元二年（一三三七）、北国へ向かった新田軍は、金崎城（福井県敦賀市）に入りますが、足利軍の総攻撃によって落城。この時、景春の弟義春は戦死。新田義貞は弟の脇義助と共に城を脱出して、神山（福井県南条郡）に入りました。その時、景春と篠塚伊賀守重広などの武将も帰陣し、隠れていた敗軍の兵も集まり、その兵力は三千にもおよびました。



新田軍の脇義助と足利軍の細川出羽守が合戦を行った高木神社（現八幡神社・福井県越前市）

延元三年（一三三八）二月中旬、脇義助は国府城を攻めるのに適当な要害の地を探すために、中野藤内左衛門景春・篠塚伊賀守重広等、百五十騎を従えて鯖江（福井県鯖江市）へ出撃。これを見て、斯波高経の副将細川出羽守が五百余騎で国府城から出陣し、義助の軍勢を三ヶ所から取り囲みました。義助軍は細川軍に対し、高木の杜（福井県越前市、現在の八幡神社）の杜を背に、矢種の限り射かけて攻撃したので、足利軍は、たまたらず川の浅瀬を渡って撤退。景春たち八騎が川を渡ってさらに追撃しようとしたが、義助がこれをとどめ、篠塚伊賀守に向かつて「この辺の在家に火をかけて、遠近の味方に知らせよ」と命じました。

その煙を見た総大将新田義貞も出陣し、国府城からも斯波高経が出撃。合戦となりました。その時、神山からも新田軍の別動隊が出撃し、足利方の背後に回ったので、挟み撃ちをおそれた高経は足羽の城へ撤退。勢いづいた義貞軍は国府城を占領し、二か月余りの間に越前国内の城を次々に攻略。しかし、高経のこもる足羽七城の本城黒丸城（福井県福井市）は抵抗強く、依然として攻略することができません。その後、新田義貞軍は黒丸城をはじめとする足羽七城への総攻撃をかけることとなります。

中野藤内左衛門景春

Nakano Tounzaemon Kageharu ●なかのとうないざえもんかげはる

鎌倉合戦以来、新田義貞に付き従い数々の合戦を戦い駆け抜けた景春。義貞のために戦い、そして死す…。死よりも武士としての名誉を重んじた忠義の臣であった。

新田義貞に殉じた忠臣

殉死した夫の冥福を祈り続けた妙言法尼

中野藤内左衛門景春の奥方は、夫の殉死を聞いて悲しむことに限りがなかった。生前景春は持仏として、如意輪観世菩薩を拝んでいた。奥方は、この如意輪観音を拝して、尼となり妙言法尼と号することになった。

興国二年（北朝の年号は暦応四年）一三三四年三月、妙言法尼は押落（大字中野字蛭沼）の観音畑と名づけた、地勢が険しく人跡もまれな山の端に庵を結び、そこに如意輪観音像を安置し、朝夕殉死した夫のことを思い、その冥福を祈り続けたのです。



谷中如意輪観音は、夫婦和合・安産・長寿・福富をみちびき、病氣や苦難を救うといわれています。町外からも数多くの参拝客が訪れます。縁日は毎月17日、例祭は1月17日、8月17日に行われ、ご開帳は午年（うまだし）の12年ごと



と字茶碗破した。茶碗の庵があった中野字蛭沼（大字中野）の妙言法尼の庵が押し落され、妙言法尼の如意輪観音像の一部が出土した。茶碗は中国伝来の茶碗です。

慶長三年（一五九八）九月、中野氏の家臣の孫、金井左五衛門・神藤外記の二人が、押落の妙言法尼の庵の跡から谷中の現在地に、如意輪観音像を移し、世の人たちが広く礼拝できるように、お堂を建てました。これが谷中観音堂で、宝永五年（一七〇八）四月には、回国修行僧堯親が東上州三十三観音霊場に定め、第九番札所となりました。

谷中如意輪観音

●やなかによいらんかんのん

忠義の武将景春死す
死を軽んじて名を重んずるを義とする
延元三年（一三三八）閏七月二日、総大将新田義貞は、足利方がこもる足羽七城総攻撃の命令を下し、軍勢を七手に分けて七つの城を一举に攻撃しました。しかし、藤島城が必死の防戦をしていて、新田軍は攻めあぐんで、戦いは夕方近くまで続いていた。
義貞は藤島の寄せ手が苦戦しているという報告を受け、自ら陣頭指揮を執るため、中野藤内左衛門景春を従え、わずか五十騎で藤島城へ向かいました。道をかえ、畦道を伝わって行くと、たまたま黒丸城から藤島城救援に向かう、高経の副将細川出羽守の軍勢三百余人と出会ってしまった。細川軍は徒歩の兵士が多く、弓矢を持って深田に走り下り、盛んに矢を射けてきました。
この時、義貞の軍は騎馬で弓の用意がなく、弓矢の雨の中、義貞を守り家臣た

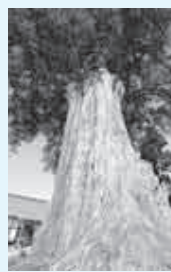


脇義助石像（太田市脇屋の正法寺）

ちが、次々に矢面に立ちふさがって戦死。景春は義貞に「大将たるものは、小さな事にこだわらず、この場合は退却して小さなと忠告したが、義貞は聞き入らず」「大事な家臣を失って、独り免れるのは、私の本意ではない」と、なおも駿馬に鞭を入れ、敵の中へ駆け入ろうとしたが、さすがの義貞の名馬も五本の矢を射立てられ、小さな拙一つを越えられず、土手下に倒れてしまいます。
義貞は左足を馬に敷かれ、立ち上がろうとしたところへ、白羽の矢が肩間に命中。もはやこれまでと自害して果てました。この時、敵の氏家重国という者が駆け寄って、義貞の首をとって黒丸城へ持ち去ってしまいます。畦を隔てて戦っていた景春は、この光景を見てすぐに駆け寄ったが間にあわず、結城上野介・金持太郎左衛門とともに、首のない義貞の死骸の前にひざまずいて、自害して果てました。景春三十八才。くしくも義貞と同一年でした。



南朝の総大将新田義貞が祭られている藤島神社（福井県福井市）



神光寺の大カヤ

県指定天然記念物

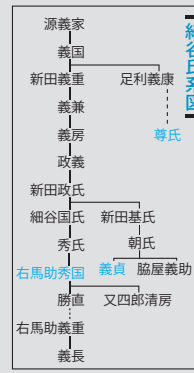
神光寺の大カヤは、樹高21メートル、幹周り5.6メートル、枝張り東西20メートル、南北23メートル、根周り15メートル、地上6メートルのところで20枝に分かれています。樹齢は、文永二年（1265）、中野氏が城を構築したときから、700年以上が経っています。今の神光寺は、本丸跡に開かれたものです。この大カヤも太平記の時代を今に伝えているのです。

合戦に次合戦

秀国、常にその身は戦場にあり

秀国は、清和源氏新田一族で新田五代政氏の長男国氏の孫です。八代新田義貞とは、ほとんどこになります。秀国の祖父国氏は長男ですが、新田庄細谷に分家して細谷氏を称し、弥太郎国氏と名乗り、その子が秀氏、秀氏の長男が秀国となりました。元弘三年（一一三三）、新田義貞が鎌倉幕府討幕の旗挙げを行うと、秀国も新田一族として最初から参画。鎌倉幕府滅亡後、恩賞の沙汰があり、「右馬助」の称号が与えられ、越後の新所領が新田庄細谷領に加えられました。

一方、足利尊氏は建武政権の恩賞に不平を抱く武士たちを集め、建武二年（一一三五）八月、突然朝廷に反旗を翻しました。これを受け同年十一月、後醍醐天皇は義貞に尊氏追討を命じ、秀国も追討軍に参加。その後の箱根竹ノ下合戦、京都攻防戦と戦歴を重ねることになります。京都攻防戦の後、尊氏は九州に敗走。後醍醐天皇は、この機に乗じ、足利方の勢力を一掃するため北畠顕家を奥州へ、新田左馬助義氏には篠塚伊賀守重広を伴わせ東海地方へ、細谷右馬助秀国と畑六



新田庄細谷領にあった新田氏ゆかりの冠稲荷神社

郎左衛門時能を差し向けました。ところが、秀国が北陸道の備えに当たっている間、九州へ敗走したはずの足利尊氏が、勢いを盛り返して水陸から京都へ攻め上って来たのです。これを迎え撃つ新田義貞と楠木正成は兵庫の合戦に敗れ、正成は淡川で戦死、義貞も京都へ撤退。これを追って尊氏も京都へ入り、北朝の光明天皇を立てて、後醍醐天皇に対抗しました。

延元元年（一一三六）十月十日、足利尊氏は計略により和睦を申し入れ、後醍醐天皇は山門から都に帰ることになりました。一方、新田義貞は皇太子恒良親王・尊良親王を奉じて、北国の金崎城（福井県敦賀市）へ入りました。ところが、天皇が都へ帰る途中、尊氏の弟足利直義に捕らえられて、花山院に押し込められてしまします。十二月二十一日、天皇は花山院から脱出、吉野へ移り、吉野朝が成立。これより北朝に対して南朝と呼ぶようになります。

延元二年（一一三七）三月六日、金崎城は足利方の総攻撃に陥落。新田義貞と弟脇屋義助は援軍を求めるため、仙山（福井県南条郡）へ脱出。仙山の義貞のもと

へは、敗軍の兵などが各地から集まり、たちまちその勢力は三千になりました。この動きを察知した足利尊氏は、高経を大将に軍勢を国府（福井県越前市）へ差し向けました。秀国は別動隊として、越後から北陸道の鎮定に当たっていました。だが、義貞本軍の仙山後詰めとなって加賀から越前へ軍を進め、高経の国府へ迫りました。この時、秀国は加賀・越前の武士たちを集めて、三千余騎の大将となり、北陸道を押さえ、仙山の義貞・三峯（福井県鯖江市）の脇屋義助と示し合せて、斯波高経の退路を断りました。

延元三年二月中旬、総大将義貞が仙山から出陣し、高経も国府城から出て、両軍合戦となりました。この時、新田の一

軍が敵陣の後ろへ回ったので、高経は国府を捨てて敗走。義貞は国府城を攻め落とし、勢いで、越前国内の城々を攻略。しかし、足利方は足羽七城の本城黒丸城（福井県福井市）にこもって、なおも抵抗を続けていました。

延元三年（一一三八）閏七月二日、この新暦では八月二十四日の暑い盛り、新田義貞は、足羽七城の総攻撃を開始。ところが、七つの城内、藤島城だけは必死の抵抗で、日暮れ近くになっても攻略できません。そこで、義貞は自ら陣頭指揮を執るため、手勢五十騎ばかりを引き連れ藤島城へ向かいました。その時です突然、横合いから徒歩の敵兵が現れ、盛んに弓矢を射かけてきたのです。たちま

天下の人傑、武略の名将

秀国

Hosoya Umanosuke Hidekuni ●ほそやうまのすけひでくに

新田一族にして、太平記に「天下の人傑、武略の名将」と謳われた知勇兼備の武将、秀国。義貞戦死後、坪谷の地に泉福寺を建立して、新田氏一族一門、そして戦乱に散っていった者たちの冥福を祈り続けた…。

秀国、坪谷の地に泉福寺を建立する

秀国は新田一族一門、そして戦乱に散っていった家臣たちの冥福を祈り続けた

泉福寺 (せんぶくじ)

籠宮山観音院泉福寺は、秀国が坪谷の地に居を構え、出家して「入道弘林」と称したときに建立した寺です。山号の「籠宮」は、丹後国（京都府宮津市）元伊勢籠宮神社から祭った「籠宮」の神号。院号の「観音」は「聖観音像」で観音堂に安置され、寺号の「泉福」は秀国の家臣で戦乱に散った者たちや新田一族一門の黄泉浄土の冥福を祈るために建てた寺という意味です。明治維新後、泉福寺は廃寺となり今は跡を残すのみとなりました。



泉福寺跡 (篠塚坪谷)

籠宮稲荷神社 (このみやいなりじんじや)

籠宮神社は、明治初年の神仏分離令のため泉福寺から分離して坪谷・水立・大黒の共有となり、泉福寺稲荷社とともに、独立した神社となりました。社号は籠宮稲荷神社。現在の社殿は昭和13年に新築されました。奥殿には、籠宮神社と稲荷神社の小宮二座が安置されています。



現在の籠宮稲荷神社 (篠塚坪谷)

籠宮神社 (このみやじんじや)

籠宮神社は泉福寺の山号となり、寺の守護神でもありました。泉福寺とともに南北朝時代から室町時代～江戸時代を経て現在まで、坪谷・水立・大黒の地元守護神として尊崇されてきました。



籠宮稲荷神社の奥殿には籠宮神社と稲荷神社の二座が安置されています。向って左が籠宮神社

聖観音像 (しやうくわんのんぞう)

泉福寺の院号と聖観音像は、江戸時代の宝暦4年(1754)には「西国移し両野三十三所観音霊場」の第七番に指定されました。

聖観音像 (篠塚坪谷)



(御詠歌)
かずかずのあられ
五ちる篠塚に光を放つ
影も頼母し

秀国故国に帰る

坪谷に居を構え出家して弘林と称す

ち配下の兵たちは射倒され、義貞も眉間を射られてあえなく最後を遂げることに。ここに足羽・藤島の合戦は、総大将新田義貞の討ち死により、味方は総崩れとなり幕を閉じることになりました。

新田義貞戦死後、細谷右馬助秀国は再起を図って西に向かい、若狭湾を漁船で西岸に渡り、丹後国与謝郡府中（京都府宮津市）の辺りに身をよせました。この地には丹後国一ノ宮、天橋立・元伊勢籠神社が鎮座しています。「籠神社」は神代の昔、籠舟に神様が乗ってきたという



細谷館跡 (篠塚坪谷) 篠塚のほぼ中央部を南北に走る県道足利赤岩線沿いに細谷館 (右馬助館) 跡があります

ので、この名があるといわれます。

正平二年（一一三三）、秀国は故国に帰り、邑栗郡佐貫庄篠塚坪谷の地に居を定め、元伊勢籠神社から奉じてきた神霊を祭り、自らは出家して弘林と称し、泉福寺を建立。その没するまで、新田氏一族一門、そして戦乱に散っていった者たちの黄泉浄土の冥福を祈り続けたのです。

乱世を駆け抜けた英雄たち
その波瀾に満ちた物語は、
今も、この地に残る。



教科書の歴史だけを学ぶのではなく、自分の生まれ育った郷土の歴史にも、ぜひ目を向けてほしいです

歴史研究家
細谷 清吉さん

Profile

ほそや せいきち / 大正12年4月生まれ。邑楽町篠塚出身。新田史研究会会長 / 昭和16年、講道館・古武道場入門。同18年、学徒出陣東部75部隊(横須賀重砲隊)入隊。昭和21~46年、群馬県立太田中学校・同高等学校教諭を経て、歴史研究の道へ。同47年12月から広報おうらに執筆、現在も連載中。 / 昭和60年、上毛社会賞、同61年サントリ―地域文化賞、平成16年、日本広報協会賞を受賞。 / 主な著書は「中世の邑楽町」、「新田義貞四天王篠塚伊賀守重広」、「町の歴史人物」、「古代の邑楽町付観音霊場」など多数。

郷土の歴史に光を照らす

生まれ育った郷土の歴史を知る

太平記は軍記物語で四十巻。北条高時の鎌倉幕府における失政、後醍醐天皇との対立、建武の中興、南朝と北朝との五十余年間にわたる争乱を書いたものです。その史実性の高さは評価されており、この邑楽町に関する三将の活躍ぶりが見事です。三将のほか、新田義貞が鎌倉を攻め落として、北条氏を滅ぼしたとき、北条高時の第四郎泰家が自決を装って鎌倉を脱出したことも出ています。多々良沼の鶴古城は、泰家が弟朝春と三人の從者とともに逃れて来たところだそうです。

一つの軍記物語に邑楽町に関係する武将が三人も登場していることは、本当にまれなことです。新田義貞に武節を通して豪勇篠塚伊賀守重広は、太平記中どこを見ても傑出した武将で知られ、とても有名です。篠塚城の跡は、今も篠塚馬場地内に残っています。

また、中野藤内左衛門景春は、どここの出身の武将なのか、それまで説明されておりませんが、さまざま古文書などを読みほどこいていくうちに、実は邑楽町出身の、それも中野城の三代城主であることが分かったのです。義貞が討ち死にしたとき、義貞の死骸の前にひざまずいて殉死した忠臣、その景春由来の如意輪観音が、谷中の地に今も存在していることは、とても意義深く、町の貴重な歴史の財産です。

細谷右馬助秀国にいたっては、太平記に「天下の人傑、武略の名將」と評され、晩年は篠塚の坪谷に泉福寺を建立し、新田氏一族の冥福を祈り続け「細谷館」の祖となりました。

邑楽郡下でも邑楽町は、特筆すべき歴史が数多くあります。伊賀守が出陣の際武運を祈願した長柄神社、細谷右馬助秀国が丹後国から勧請した籠宮神社、泉福寺跡などの関係史跡。また、中野藤内左衛門の墓地は十三本塚と呼ばれ、今の十三坊塚の地名の由来になっておりま。また、三武将関連以外にも永明寺の開基、夢窓国師お手植えと伝えられる「キンモクセイ」は、国指定の天然記念物になっています。この他にも中世の邑楽町に関係する史跡、地名の由来など数多くの歴史が、この地にはあります。

自分の生まれ育った郷土の歴史を少しでも知っておくようにする。簡単なようですが、実は日々の生活の中で忘れがちな視点です。ですが、それがこそ郷土愛につながる出発点になると考えます。



◀「新田義貞と篠塚伊賀守重広」(篠塚五郎右衛門家所蔵)

太平記 鎌倉時代に約50年以上も続いた戦乱を書いた軍記書物。今回の取材を終えて、日本を代表する軍記書に初めてふれ、少しだけですが、内容を勉強するきっかけを得ました。今まで私自身にとって太平記は、とても遠い所の物語だと思っていました。しかし、自分の住んでいるこの邑楽町から生まれ、その戦乱の中に身を投じた武将たちがいたということ、とても驚きました。

また、言い伝えとともに見学したゆかりの地は、今まで何気なく見ていた町の寺や墓地、神社の見方を一変させてくれました。名前も知らなかった武将の生き様、言い伝えも知らなかった各所の史跡、この取材を進めるまでは、まったく気にも留めていなかった風景、何も考えずにいけば、ただ通り過ぎてしまうようなものでしたが、取材を進めていくにつれて、同じものを見ているはずなのに当時の時代を想像するようになりました。

してみようと思いました。今回のレポートは、ほんのきつかけです。邑楽町にはたくさんさんの歴史があり、文化財もあります。皆さんもきつかけとして、自宅付近を散策してみてください。いかがでしょうか。当然、自宅付近ですから見慣れてしまっているがゆえに特別に見えたりはしないかと思いますが、風景など調べて、改めてすごいのだと分かったとき、再び同じものを見てみてください。じっくり見る目を持ち、その時代を想像し、考えられるようになるはずです。過去の邑楽町を、そしてみんなで大切にしていきたいと思ってい

街角特派員 雲松雄志

- 参考図書 新田義貞 四天王 篠塚伊賀守重広
- 新田義貞の歴史人物
- 新田義貞の歴史人物
- 新田義貞の歴史人物
- 新田義貞の歴史人物
- 新田義貞の歴史人物
- 新田義貞の歴史人物
- 新田義貞の歴史人物
- 新田義貞の歴史人物
- 新田義貞の歴史人物

